



早期発見から治療まで

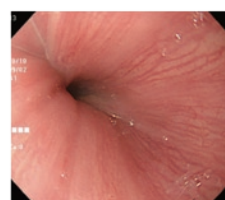
まほろば 7 月号では、皆様に出来るだけストレスなく内視鏡検査を受けて頂くための当センターの取り組みについてご紹介させて頂きました。とは言うものの、早期発見のために受けて頂く内視鏡検査です。見落としのある検査では意味がありません。

当センターでは、精度の高い検査をご提供することはもちろん、診断から治療、治療後の入念な経過観察までを一貫して行っています。今回は、当センターで導入している内視鏡システムやがんの内視鏡治療についてご紹介させて頂きます。

最新内視鏡システムで小さながんも発見

内視鏡機器の進化や診断学の向上により内視鏡検査で小さながんを見つける事が可能になってきました。当センターではオリンパス社製の最新内視鏡システムを導入しています。このシステムはハイビジョン画質を超える明るく高画質な観察を可能とし、NBI (Narrow Band Imaging=狭帯域フィルター内視鏡) 技術を標準搭載しています。

NBI 観察では、通常光で観察しにくい毛細血管の集まりやそのパターンを鮮明に描出できます。さらに拡大観察を併用することで、がんの表面に出来る血管のわずかな変化をとらえることができ、早期発見につながります。



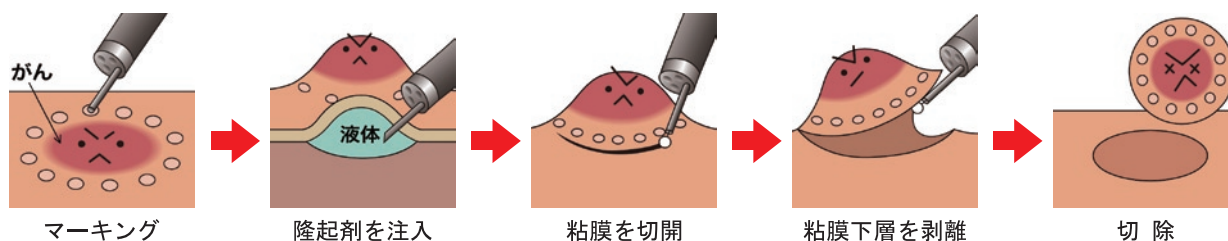
通常光での観察



NBI 拡大観察
(赤丸内ががん組織)

おなかに傷をつけずにがんを治す

ある一定の条件を満たし、リンパ節転移を起こしている可能性が少ないと考えられる比較的早期のがんは、臓器を温存したまま内視鏡で局所だけを切除し、治療することが可能と考えられています。当センターでは初期の胃がんに対して内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) を行っています。ESD は電気メスでがんを周囲の粘膜下組織ごと剥がす治療で、一括切除することで根治を目指します。内視鏡治療は外科手術に比べおなかに傷がつかず、治療後も胃の機能が温存できます。入院期間も 1 週間～10 日程度で、患者さんにとって比較的負担が少ない治療と言えます。



早期発見が何よりも大切。
まずは内視鏡検査から。



消化器センターへのお問合せは
079-239-3121 (代) まで。